

自由研究発表

北カリマンタン州内陸部プナン社会の商業狩猟採集を基盤とする世帯の生計維持  
Livelihoods of commercial hunting and gathering based households in an inland  
Punan community of North Kalimantan

佐野 洋輔 (早稲田大学)

Yosuke Sano (Waseda University)

カリマンタンには、かつて遊動型の自給的狩猟採集生活を営んでいた「プナン」と総称される人びとが暮らしている。プナン社会では、過去半世紀の間で定住化と農耕化が進んだが、広大な天然林に囲まれた内陸部の村々では、現金獲得を目的とする商業狩猟採集を基盤とする生計が営まれ、近隣の焼畑民に対して経済的に優位に立つ村もある。定住村の開発の恵みと天然林の自然の恵みの両方を享受できる内陸部の生計のあり方は、プナンにとって理想的な暮らしとされてきた。一方で、生業経済レベルでの未熟な農耕技術に由来する食料自給の不確実性や市場経済レベルでの現金収入を商業狩猟採集に頼ることの不確実性による生計維持の困難さも指摘されてきた。

本研究では、プナン社会の世帯が、前述の二重の不確実性にいかに対応して日々の生計を維持しているのかを、北カリマンタン州マリナウ県のプナン・アプット社会の事例から検討する。そのために、11世帯を対象に1年間毎日の生計活動、現金収支、食事内容を記録する世帯経済調査を実施し、この記録を世帯内の労働力配分と世帯外との経済関係に着目して分析した。分析の結果、現在のプナン世帯の生計は、夫は遠隔地の森に寝泊まりして不確実だが大きな収入が期待できる沈香・砂金採集に最大限労働を投下し、妻は集落周辺で対価は低いが確実な収入となる賃労働や籐手工芸品製作に随時従事し、主食生産へは夫婦で最低限の労働を投下していることが分かった。このような世帯内の労働力配分には、他世帯からの食物分配や賃労働機会提供、林産物商人からの融資といったセーフティーネットの存在を前提に、現金獲得活動を優先する姿勢が読み取れた。発表では、さらに、先行研究で指摘されてきたプナンの林産物商人や政府への「依存的」とされる関係について、これらの関係を世帯生計全体の中に位置づけることで問い直しを試みる。